

「無量光」2013年 水彩、紙 53.0×41.0cm

## イベント

**ギャラリーツアー** 3/4[日] 15:00~16:00

案内人:大倉宏(砂丘館館長)/参加無料/申込不要・直接会場へ

同時期開催 観覧無料

**渡邊博展** 3/2[金]▶10[土] 11:00~18:00(最終日~17:00)

会場:新潟絵屋/新潟市中央区上大川前通10-1864

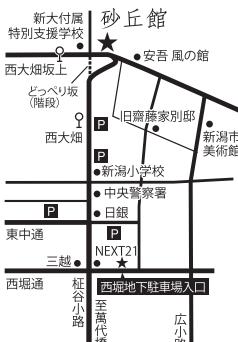
Tel.025-222-6888 info@niigata-eya.jp

渡邊 博(わたなべ ひろし)

1938年新潟市生まれ。熊谷喜代治にデッサンを学び、後笛岡一に師事。日展、光風会に出品し、66年光風会会員となるが、68年退会。以後は紀伊国屋画廊、美術ジャーナル画廊、現代画廊、ギャラリーXepia、ギャラリー汲美、(株)東京現像所、K'sギャラリー、セッションハウス(いずれも東京)、ギャラリーDEN(ドイツ・ベルリン)などで個展により発表。新潟での個展は91年新潟伊勢丹、2002・05・08・12・16年新潟絵屋。千葉県南房総市在住。



「人形たち」1991年 油彩、キャンバス 60.6×72.7cm



砂丘館

旧日本銀行新潟支店長役宅



新潟市中央区西大畠町5218-1

tel.&fax. 025-222-2676  
sakyukan@bz03.plala.or.jp  
<http://www.sakyukan.jp/>

指定管理者/新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体

新潟駅万代口より浜浦町線C2系統または観光循環バス乗車「西大畠坂上」下車徒歩1分  
※砂丘館には駐車場がありません。また、周辺の道路は駐車禁止です。公共交通機関をご利用ください。  
※新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は駐車券提示にて1時間分の無料券を差し上げます。

私たち砂丘館の自主事業を応援しています。

雪國かれい 株式会社

NSGグループ

株式会社 ナレッジライフ

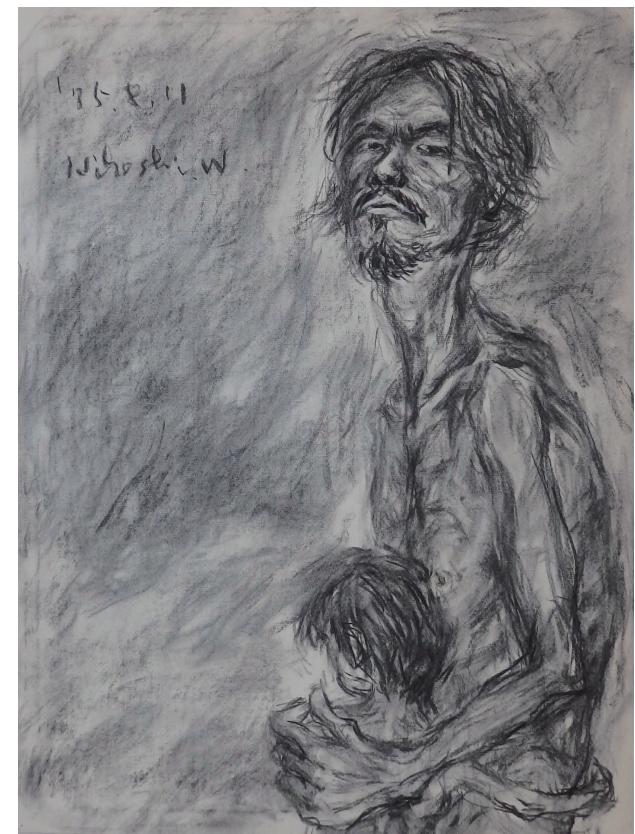
SHIKAWA

株式会社 新潟ビルサービス

丸屋本店

藤田金属

郷土の文化に親しむ会



「息子を抱く自画像」1975年 木炭、紙 64.0×49.0cm

# 闇の明るさ 渡邊博展

2018

2/23[金]

3/21[水・春分の日]

9:00~21:00 月曜休館

主催:砂丘館

入館無料

砂丘館

旧日本銀行新潟支店長役宅

## 絶望のやさしさと闇の明るさについて

大倉 宏



「やさしい斑紋」1988年 油彩、キャンバス 60.6×41.0cm

渡邊博の絵を初めて見たのは、小財堂画廊という、銀座の小さい画廊だった。

今から29年前のこと。

当時新潟日報の夕刊に月一度掲載の「カルチャーにいがた」という欄があった。以下はその「アート」欄に、渡邊の個展を紹介して、私が書いた文章(1989年2月25日掲載)の一部。

「案内状に書かれた略歴を読むと、渡邊博は1938年新潟市の生まれ、熊谷喜代治、 笹岡了一に師事とある。なるほど会場には、どこか熊谷喜代治のガラス絵を思わせる柿の絵があつたし、画のくすんだオーカーがかった色調には、そう思って見れば、 笹岡了一の残響がかすかに聴きとれた。だが、絵の呼び醒ます心象は、いずれとも(特に 笹岡了一とは)全く違う。軽く叩き、やさしく抑えるような筆使いに、ふとボナールを連想するのだが、そのボナールの絵をあたかも「裏側から」眺めるような印象を、私は受ける。絵の表面を覆う、さまざまなもの名前を、次第に忘れていくにつれ、逆に鮮やかに感じられてくるのは、やはり「闇」の感覚だ。いや私は、むしろはじめから、それらのイメージを見てはいなかったのかも知れない。ひとつの眼を閉じ、もうひとつの眼で、私には親しい、その闇にじっと触れていただけだったのだ。」

砂丘館と新潟絵屋での回顧的展示のためにお借りしてきた絵を、冬の和室で広げた。久しぶりの大雪で砂丘館の庭は白い。

初期の作品「息子を抱く自画像」に、とても打たれる。そして、冬の夕暮れの窓のような青い風景。鏡や人形や経文などが浮遊する80~90年代の作風を経て、渡邊の絵は抽象に変化していくが、次々と絵を広げながら、あのとき感じた「闇」の感覚を、変わらず自分が受け取ってきたことに気付く。

「息子を抱く自画像」は雄々しい。でも裸身のふたりは瘦せていて、子は父にしがみつき、「何か」に立ち向かう顔で振り仰ぐ父の手は、保護するようにその子を抑えているが、目には無力を自覚するような諦念の影がただよう。

襲いかかっているのが猛烈な寒気であり、嵐であり、猛獸であるなら、とても助かりそうにない。そのような絶望的ありようの暗さが、けれどこの絵に、どこか無限のやさしさを与えていた。渡邊博の絵はそんなふうに人間の心をあたため、明るませてくれる。変わらない。

砂丘館は昭和8年建設の家で、受付のある「書斎」は木枠の古い窓のままだ。大雪が見舞う日の前日の午後そこで話していたら、日が暮れかけ、庭の向こうの学校の白壁が浮かびあがり、庭の木々の影に重なるように、ガラスに室内の情景がうっすら映り出した。すると窓枠のなかぜんぶが、一幅の渡邊博の抽象画に見えた。窓の向こうと、先と、こちら側がひとつに溶け合う一瞬。そのような、あたかも絶望と希望が交差するような薄明という名の真昼の一瞬に向かって明るんでいく、闇という居場所に、この人はずっと裸で立ち続けてきた。

その渡邊に回顧展に寄せる言葉を依頼したら、すぐに長文の文章が送ってきた。洲之内徹の「気まぐれ美術館」でも紹介された若き日の放浪の追憶に始まり、個展で発表しはじめて以降の画家たちとの交友録を綴ったものだった。率直な文体が渡邊らしく、そのまま掲載することにした。

文中の宇野政孝(現在は宇野マサシ)、横田海、惠藤求は渡邊と同じように個展で発表し続けてきた画家たち。渡邊は初期に光風会という団体展に出品していたが、後に現代画廊、ギャラリー銀座汲美などの画廊で発表するようになった。画家たちの発表の形が変化していった時代の姿もうかがえる文章である。

(砂丘館館長)